

2023年99回箱根駅伝を振り返って

中央大学法曹会副会長 櫻井俊宏

2023年99回箱根駅伝、中央大学公式オンライン応援企画のメインコメンテーターを務めた法曹会副会長の櫻井俊宏です。

あらためて、中央大学の準優勝、おめでとうございます！

箱根駅伝としては、1996年の73回大会優勝以来の25年以上ぶりの好成績ということになります。

なぜ、このような成績を納めることができたのか。今大会、私は、「目に見えない力」というものを非常に感じたということを織り交ぜてお話していきたいと思います。

まず振り返ると、1区は1年生のスーパールーキー2人の1人、溜池一太君。その背筋の伸びた堂々たる走りを集団の真ん中で展開する姿は、良い予感しかせず、その後の中大に待ち受けている好結果を象徴しているように思えました。そして区間5位で、2区、大学界のエースとも言える3年生吉居大和君へタスキリレー。

この2区がやはり今大会の中央大学の最大のハイライトでしょう。
3年生、エース吉居大和君。

初めての花の2区を任された吉居大和君、最初で飛び出し先頭に躍り出ました。しかし、その後、駒澤の4年生田澤廉君、10000mタイム27:23、外国人選手よりも速いゆえ、ツイッター等で世界レベルの選手という畏敬の念もこめて「レン・タザワ」とも呼ばれるこの男に抜かれてしまいます。

その後、下を向き、うつむき加減で走っているシーンもあるように見受けました。心が折れかかったのかもしれません。

しかし、その後、吉居大和君と小さい頃から愛知のクラブで同じだった幼なじみでもあり、これまで田澤廉君と各駅伝でデッドヒートを繰り広げてきた青山学院の4年生エース近藤幸太郎君が、吉居大和君を抜きました。この際、「ついて来い」と言わんばかりの近藤君のジェスチャーがありました。吉居大和君はこれについていきました。

徐々に吉居大和君はペースを掴み、2区の中継所前で日本を代表する3校のスーパーエースが三つ巴になりました。

そして、最後の力を振り絞り、田澤君、近藤君の4年生スーパーエースを振り切ったのは、3年生吉居大和。

そのまま、2区は吉居大和君の勝利で終わりました。

吉居大和君、取材の受け答え等も極めて謙虚な好青年でありながら、巨大な闘志を胸に秘めていて駅伝に対する自負心は誰にも負けない（You Tubeの選手レーティングで自らの駅伝力を「オール5」と評していました。）陸上競技者の模範のような選手。

昨年の箱根駅伝1区、最初から飛び出し圧倒的な区間新、出雲駅伝1区区間新、全日本駅伝では、带状疱疹で体調不良もありながら6区区間賞。

そして、今大会では、3区や1区を予想されながら、花の2区で駒澤田澤君、青山学院近藤君を力で振り切り、区間賞。

全てのお膳立てが整ったからこそ、学生陸上界最強3者の競り合い、そして我らが吉居大和君が勝つという最高のシーン。

思えば、見えない駅伝の神は、昨年から全てこの若者に微笑んでいるような気さえします。

そして、2区3年生吉居大和君から、同じく3年生で、吉居大和君と並ぶダブルエースと呼ばれる3区中野翔太君へ。

中野翔太君は、昨年、10000m28:00という中央大学最高、昨年の全大学記録でも2位というとんでもない記録を打ち立てました。

それでも中野翔太君は、選手レーティング等で「自分は駅伝で貢献していないので」と自分はエースとはいえないという態度に終始していました。

しかし、今大会、中野翔太君は、3区で他選手を寄せ付けない走りで、区間賞をとりました。

このときこそ、中野翔太君が自他共に認める「エース」となった瞬間なのでしょう。

4区、1年生吉居駿恭君へ。溜池君と並ぶスーパールーキーも、兄らが繋いだたすきを少しでも前で繋ぐという魂の走りで、区間5位。5区2年生阿部陽樹君につながりました。

阿部君は、昨年も1年生にして5区区間6位、10000m28:30で、どの大会でも安定している実力者。そして、中央大学は、5区区間賞の藤原監督、区間3位の山本コーチ、区間3位の大石コーチをスタッフに擁し、5区のノウハウ

について最も蓄積がある学校といえなくもありません。
これは「阿部君が区間賞を取る」条件が整ったといえると思いました。
結果、阿部君は過去の5区区間記録に迫る好走、しかし、前をいく2人が区間新を出す区間3位でした。
これも見えない力が、まだ2年生の阿部君を4代目山の神にするのであれば、100回記念大会がふさわしいとしたように思えました。

そして、往路準優勝！
この往路の5人は、まだ来年も残ります。

そして復路。中大は4人の4年生を並べてきました。
4年生の最後の絞り出す走りを期待してのことでしょう。

6区主将4年生若林陽大君。普段は物静かだが、陸上に対する闘志はものすごい。
2年生6区区間5位、3年生6区区間5位、このような好走をしても、悔しそうな顔をいつもします。
最後の箱根駅伝、最後の6区、若林君は素晴らしい走りで区間2位。
しかし、駒澤大学を捉えたかったのでしょう。駒澤大学1年生伊藤君はさらなる強い走りを見せ、区間賞。差は縮まらないことが残念そうな表情でした。

7区、今期絶好調の4年生千守倫央君、区間4位。
8区、走る哲学者と呼ばれるクレバーな4年生中澤雄大君、区間7位。
9区、昨年同じく9区で爆走区間3位を見せた3年生湯浅仁君、区間6位。
いずれも、意地と感謝のこもった3位以下の後続を引き離す強い走りを見せました。

そして、10区助川拓海君も区間3位という締めくくりにふさわしい走りを見せ、駒澤に1分42秒差の復路2位、総合2位。3位の青山学院を5分32秒も引き離す圧巻の成績でした。
入学してから2位以上の成績を見ることがなかった、今後もうないのではないかと思う時代もあった私も、目頭が熱くなりました。

今回の箱根駅伝を振り返ると、往路は、中央大学に目に見えない「流れ」が完全にくいていました。全員コンディション良好、吉居大和君が勢いをつけ、往路優勝目標に準ずる2位となったわけです。
そして、その流れは復路がはじまる直前まで止まりませんでした。駒澤や青山学

院、國學院に体調不良者が続出。対して、中央は、前回区間上位経験者が3人。

「これは優勝もある。」と思わされました。

しかし、駒澤はその流れを凌駕しました。実戦的には、駒澤の6区1年生伊藤君がどのような選手かあまりデータがなく、前回大会でも活躍の中央若林君が抜くのではと思われたのに、むしろ区間賞を取ったのが大きかったと思います。

ただ、中央大学は総合3位を目指していた、それに対し、駒澤は、絶対に総合優勝、三冠をとるという目標をかかげて突き進んでいたことが、少しずつの見える差となって出てきたのではないのでしょうか。大八木監督が終了後退任を発表したことからも、よほど今大会にかける意気込みがあったのでしょう。

敵ながらあっぱれです。

とは言うものの、個人的には負け惜しみのようなものでもなんでもなく、一気に優勝までとっては、喜びの回数が少なくもったいない、次回を楽しみにしたい、と考えております。なぜなら、今回は記念すべき100回大会だからです。

吉居大和君という陸上界の至宝を中心に、選手がまとまっていき、その選手が4年生である次回大会こそ、満を持して優勝を狙う流れなのだと思います。

そのためには、選手の日々の研鑽、チームの研鑽等が差をつけることになりませんが、更に必要なものがあります。そう、目に見えないみんなの「応援」です。その1人1人の応援があるからこそ、中央大学の応援全体が盛り上がっていき、選手の目に見える応援も増え、その力が選手を後押しするのだと、今大会の盛り上がりを見てひしひしと感じました。

皆様、100回記念大会優勝に向けて、共に中央大学を応援していきましょう。